

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月30日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530762

研究課題名（和文） 大学生を対象としたデートバイオレンス加害行動の分類と対処方略に関する研究

研究課題名（英文） typologies of dating violence offenders and coping strategies.

研究代表者

越智 啓太（OCHI KEITA）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：40338843

研究成果の概要（和文）：近年、大学生の間で恋愛関係における暴力、不合理な支配などの行動が大きな社会問題になっている。そこで、本研究では、大学生を対象として、大学生が遭遇するデートバイオレンス、デートハラスメントの加害行動についてその現状を調査し、犯人の行動パターンについて、実証的なデータに基づき分類を行なった。また、それぞれのタイプごとの行動特徴と対処方法について分析した。

研究成果の概要（英文）：Recently, the dating violence and harassment between a college student's couples serves as a big social problem. In this study, offending behaviors made in dating violence and harassment of university students were classified based on empirical data. Also, features and coping strategy for each behavior type were analyzed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：デートハラスメント / デートバイオレンス / デートレイプ / ドメスティックバイオレンス / 大学生 / 恋愛関係 / 虐待 / 防犯

1. 研究開始当初の背景

近年、交際相手からの様々な強制行為に悩む大学生が増えている。たたく、首を絞める、殴るまねをして脅すなどの身体的暴力のみでなく、繰り返し批判したり、非難する、侮辱的な言動をするなどの言語的暴力、借りた金を返さない、アルバイトをやめさせるなどの経済的暴力、過度の監視や友人関係への介入、服装や髪型の強制などの精神的な暴力、性的行為の強制や裸の写真をとるなどの性的暴力などの多様な行為である。

これらの行為は、広い意味でのデート DV

（ドメスティック・バイオレンス）といえるであろう。このような行為は被害者にうつや不安などの精神症状や不眠や吐き気などの身体症状を引き起こす。なによりも本来、楽しいはずの恋愛関係を苦痛に満ちたものにしてしまう。そのため、この種の強制行為を、防いでいく必要がある。

しかしながら、現在、デート DV への対策はなかなか困難である。

第1の原因は、デート DV の実態がわかっていないことにある。デート DV のうち、警察等の機関に届け出られるのは傷害などが生じてしまったごく一部のケースに限られ

てしまうし、また、被害者、そして加害者自身が自分が行っている行為がデートDVであると認識していないケースが多いためである。現在、いくつかの被害調査が行われているが（総理府による男女間における暴力についての調査(2000)、かながわ女性センターによる高校生対象の調査(2005)等）、これらの調査においては、調査されている加害者の行為が網羅的でなく、身体的暴力と性的暴力を中心となっていること（現在、大学生が直面しているデートDVのもっともポピュラーな形態はこれらの形態よりもむしろ、精神的な暴力であると考えられる）や、単に発生頻度や被害状況を調査しただけであり、加害者や被害者の特性との関係について十分に分析されていないなどの不十分な点が見られる。

第2の理由は、デートDVにどのように対処していくのかについて明確な指針が得られていないことにある。そのため、女性センターなどのデートDVのパフレット等でも「よく話し合しましょう」や「デートDVに悩んでいる人がいたら話をよく聞いてあげましょう」といったレベルでの対応策の例示にとどまっているのが現実である。この問題に関して海外では、調査データを用いたエビデンスベースな対策研究が行われはじめているが、現在のところこれらの研究は我が国ではほとんど紹介されておらず、また、実証的な研究もほとんどない。

そこで、本研究においては、大学生を対象としてデートDVの実態を把握するとともに、デートDVに対応するための対処方略について検討していくことにした。

2, 研究の目的

大学生を対象としたデートDV（ドメスティック・バイオレンス）について、実態を調査し、適切な対処方略について検討する。加害者の行動を統計学的に分類し、加害者タイプ、加害フェイズごとに様々な対処方略の有効性について分析、評価する。分析結果をふまえて大学生向けの防犯教育プログラムを作成する。

3, 研究の方法

研究は質問紙調査とその分析によって行った。詳細な方法については4, 研究成果にあげてある。

4, 研究成果

(1) デートDV被害パターン測定用尺度作成のための調査

被験者：大学生 84名(男性 49名、女性 35名)

方法：大学生が日頃遭遇するあるいは遭遇する可能性のあるデートDVの項目を収集し、デートDV測定尺度を作成することを目的と

した。従来のデートDV研究においては、「なぐる」、「ける」などの具体的な項目について質問が行われ、それごとの集計がなされることが多いのであるが、本研究においては、各種の加害行動を因子分析によって、分類整理し、カテゴリーごとの行動パターンを分析対象とすることにした。そのためにデートDVの調査については尺度化したものを使用することにする。このための尺度を作成するとともにデートDVの被害の実態を把握するのがこの研究の目的である。

項目の選定については専修大学心理学科犯罪心理学ゼミの学生とともにブレインストーミング形式で、DVに関する項目を網羅的にできるだけ多数収集して、類似の項目をまとめ、重複する項目を削除するなどして作成した。

ただし、今回の調査では大学生多数に集団的に調査を実施することなどから性的な虐待についての項目は使用しなかった。個別のフォローなどが困難なことなどがその理由である。

結果：身体的、言語的暴力の項目について、因子数を固定せずに探索的な因子分析を行ったところ、被害(身体)と被害(言語)でそれぞれ1因子が抽出されたため、これらを身体的被害因子と言語的被害因子とした。

精神的被害項目については、因子数を固定せずに因子分析を行ったところ5因子が抽出された。因子負荷量が.35よりも低かった質問項目を除外して再び因子分析を行ったところ、5因子が抽出された。各因子について内的整合性を確認するために α 係数を求めたところ、第1因子 $\alpha=.84$ 、第2因子 $\alpha=.72$ 、第3因子 $\alpha=.77$ 、第4因子 $\alpha=.72$ 、第5因子 $\alpha=.57$ であった。第1因子では「相手に相手以外の異性と会うことや話すことを制限されたことがある」や「勝手に携帯電話の履歴などを見られたことがある」などで、これを<精神的被害>と命名した。第2因子には「相手が自分の髪形の趣味を押し付けてくることがある」や「相手が自分の服装の趣味を押し付けてくることがある」などの質問項目があり、これを<押し付け>と命名した。第3因子は、「別れようとする、自傷行為などでおどかされることもある」や「別れようとする、私が困ることを言っておどかされることもある」などの項目があり、これを<脅迫>と命名した。第4因子は、「ものを貸したまま返してくれないときがある」や「服装について文句や馬鹿にするようなことを言ったりしてくる」などの質問項目があり、これを<無責任・否定>と命名した。第5因子は「相手が他の異性と付き合っている」や「他の異性や以前の交際相手と比較されることがある」などで<比較>と命名した。

(2) デート DV 加害パターン測定用尺度作成のための調査

被験者：大学生 78 名(男性 40 名、女性 38 名)

方法：第 1 調査では、被害行動についての尺度を作成したが、第 2 調査では加害行動についての同様の尺度を構成した。第 1 調査で使用した項目を加害用項目として再構成した。つまり、「相手から、自分の髪型の趣味を押しつけられたことがある」→「相手に、自分の髪型の趣味を押しつけたことがある」に修正して、質問紙を作成し、実施した。

結果：因子分析、主因子法、プロマックス回転によって分析を行った。

まず、加害(身体)と加害(言語)について、因子を固定せずに因子分析を行ったところ、それぞれ 1 つずつの因子が抽出されたため、これらをそれぞれ身体的加害因子と言語的加害因子とした。

加害(精神)では、すべての参加者が同様の回答をした質問項目を除外してから因子分析を行った。加害(身体)や加害(言語)と同じように因子数を固定せずに分析をおこなったところ、はじめ 5 因子が抽出された。因子負荷量が .35 よりも低かった質問項目を除外し再び因子分析を行ったところ、5 因子が抽出された。各因子について内的整合性を確認するために α 係数を求めたところ、第 1 因子 $\alpha = .79$ 、第 2 因子 $\alpha = .72$ 、第 3 因子 $\alpha = .75$ 、第 4 因子 $\alpha = .77$ 、第 5 因子 $\alpha = .63$ であった。第 1 因子では「相手の髪形について文句を言ったり、馬鹿にするようなことを言ったりすることがある」や「相手の交友関係や行動をチェックしている」、「携帯電話のメモリ(アドレス)を勝手に消去することがある」など様々な種類の精神的な加害行為が含まれており、これを「精神的加害」と命名した。第 2 因子には「相手に自分の服装の趣味を押し付けてしまう」や「相手には「自分との約束は何よりも最優先」するように言っている」、「相手が自分以外の異性と会うことや話すことを制限することがある」といった質問項目が含まれており、これを「自己優先」と命名した。第 3 因子では「相手の大切にしているものを壊したり、捨てたりすることがある」や「相手の実家やアパートに押しかけることがある」などの質問項目がみられたので、これを「破壊・恐怖」と命名した。第 4 因子は「相手から借りているお金を返さないことがある」、「デートの時などに相手に奢らせることがある」などの項目から「経済的な暴力」と命名した。第 5 因子は「相手は嫌がっているが、無理に酒を飲ませようとするがある」、「相手は嫌がっているが、無理に相手の写真があることがある」となっており、これを「強制」と命名した。

(3) デート DV 加害行動と被害行動についての調査とその関連性についての分析

方法：第 1、第 2 研究によって作成された尺度間の関係を明らかにするとともに、デート DV を引き起こす大きな原因だと考えられているジェンダー規範意識と、家庭内でのアイデンティティとの関連を探索することにした。

被験者：大学生 78 名(男性 40 名、女性 38 名)この調査は、調査 2 と同一の機会に行われたものである。

結果：

①デート DV 被害-加害の男女差についての分析

被害と加害について、それぞれの因子ごとの合計得点を男女ごとに比較した結果、身体的被害、言語的加害、被害、精神的加害、被害については男女間で差が存在しなかった。これ自体が興味深いことである。なぜなら、通常、デート DV は男性→女性の方向で行われる一方方向的なものであると考えられがちであるからである。また、身体的加害については女性のほうが大きかった。これは本調査で対象にするような比較的軽度の DV については女性の加害という行動が実際は大きい可能性があるという事を示しておりさらに興味深い。

②各加害・被害間の相関構造の分析

身体的、言語的、精神的虐待の被害・加害について相関係数を算出した。その結果、各項目間には比較的高い相関が見られた。とくに、身体的加害と言語的加害は、 $r = 0.624$ 、身体的加害と精神的加害は $r = 0.606$ 、精神的加害と言語的加害は $r = 0.657$ であり、加害行動が身体、言語、精神と複合して現れることが示された。また、言語的被害と身体的被害は、 $r = 0.638$ であった。被害-加害関連については、偏相関分析の結果、男性では身体的加害因子と身体的被害因子で $r = .582$ 、身体的加害因子と言語的被害因子で $r = .659$ とやや強めの正の相関がみられた。女性ではいくつかの因子の間で有意な正の相関がみられたが、同じ尺度同士の因子を除外すると、有意な正の相関がみられたのは身体的加害と言語的被害の間だけであった($r = .659$)。

③ジェンダー規範、家族アイデンティティとデート DV の関連について

本研究の結果、ジェンダー規範も家族アイデンティティもデートバイオレンスに影響を及ぼさないことが分かった。ジェンダー規範については現在の男女大学生の性差観はほとんど平等主義的であるということが分かり、それゆえデートバイオレンスに影響しなかったということが考えられる。家族アイデンティティが影響を及ぼさなかった点については、DV の原因については自分が育ってきた家族関係についてはあまり影響を及

ぼしていない可能性がある。これは児童虐待に於いて虐待の世代間連鎖などの問題がしばしば取り上げられ、デートDVの加害者についても家庭内養育要因が臨床的な文脈では取り上げられることが多いのと矛盾した結果である。これらの点については引き続きの検討が必要であろう。

④デートDV加害行動の分析

デートDVの加害行動について各項目間の類似性を手がかりにして非計量MDSによって空間的にマッピングを行いその特徴を明らかにしようと試みた。その結果、身体的な暴力と言語的な暴力を行い、男性優位的なジェンダー規範をもつ「男性性誇示を原因とするデートDV」、被害と加害が同居して不安定な「境界例型デートDV」、支配的な行動、精神的な虐待を中心とする「精神支配型デートDV」が存在することがわかった。予備調査や文献などでその存在が示唆されていた、「サイコパス型デートDV」、「衝動性制御不全型デートDV」については確認できなかった。

⑤デートDV加害行動と対処行動についての探索的研究

デートDV被害者を対象として、それらのDV被害を受けた場合の対処方法について、解答させ、その帰結と犯行パターンの関連について分析した。対処行動についての項目を因子分析したところ、第1因子として「何もしない・様子を見る」などの無対処因子が、第2因子として「注意する・やめてという」などの要求因子が、第3因子として「他人に相談する」などの相談因子が、第4因子として「やりかえす・殴り返す」などの反撃因子が、第5因子として「別れる」などの別れ因子が抽出された。圧倒的に多くの人にとっているのが、無対処であり、実際問題としてデートDVが何らの対処もされていないという事を意味している。また、第2因子～第6因子までについてはいずれも、虐待の頻度の減少や虐待の中止には結びついておらず(無対処の場合と差は生じない)、結果として、デートDVにおいては、現状で行われているあらゆる対策が有効性を持っていないという事が明らかになった。

(4) ストーキング型デートDVの発生要因と対処方略の研究

目的:さまざまなタイプのデートDV被害、加害パターンの関連について、大規模な被験者を用いて調査するとともにその中でとくに近年問題となることの多い、ストーキング型のデートDVを規定する要因について調査する。

被験者:東京都、神奈川県、愛知県内の4つの大学に通う大学生、大学院生493名(男性211名、女性278名、未記入4名)、平均

年齢19.80歳(SD1.81)

使用した質問紙:デートDV被害尺度、加害尺度に加え、ストーキング加害尺度、被害尺度、別れ方についての質問紙を実施した。

結果:①各尺度についての検討:デートDV加害因子、被害因子:改めてこれらの尺度についても主因子法、プロマックス回転によって因子分析を行ったとともに第1、第2研究とは若干、異なった因子構造が抽出された。被害因子については、第1因子が、精神的暴力因子、第2因子が身体的暴力因子、第3因子が言語的な暴力因子であった。加害尺度については、第1因子が精神的暴力因子、第2因子が言語的暴力因子、第3因子が身体的暴力因子、第4因子が浮気の因子であった。ストーキング尺度については、第1因子が「自殺すると言われた」、「あなたに不利な情報を流すと言われた」などの情報利用ストーキング因子、第2因子が、「迷惑な数のメールや手紙を送られた」、「デートや復縁を強制された」などの執着因子、第3因子が「意に反して後をつけられた」、「家の前で待ち伏せされた」などの接触・脅迫因子、第4因子が「所有物を壊された」、「暴力を受けた」などの暴力因子であった。

②ストーカーの予測要因についての研究

これらの項目の関連についてパス解析を行ったところ、ストーキングを行うのは精神的なDVを行う加害者である事が多い。とくに、別れの原因を相手に帰属させるときストーキングに結びつく、浮気因子の精神的虐待を行う加害者は、ストーキングをあまり行わない、などのことが明らかになった。

(5) 大学生対象のデートDV防犯教育プログラムの作成

上記の各研究から得られた結果を基にして、大学生向けのデートDV(加害・被害)防犯教育プログラムを作成した。もっとも中心になるのは大学生に対してデートDVの存在を気づかせるための90分レクチャープログラムである。このプログラムについて、実際に大学生・一般約200名を前に講演を行い、そのアンケートについて分析を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[図書](計3件)

①越智啓太 2013 「犯罪捜査」藤田政博(編)法と心理学 法律文化社, pp.23-36

②越智啓太 2012 progress and application 犯罪心理学 サイエンス社 総ページ数236

③越智啓太ほか(編)2012 法と心理学の事典 朝倉書店 総ページ数672

〔その他〕

越智啓太 2012. 12. 5 法政大学ハラスメント
相談室主催「デートバイオレンス」講演会
『あなたを不幸にする恋人の見分け方』, 法
政大学 (東京都)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

越智 啓太 (OCHI KEITA)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：40338843